

2016しずおか木造塾（第5講座）

しずおか木造塾委員会 山下晋一

I部「建築家藤井厚二の住宅作品の魅力を語る」

講師：松隈章氏（聴竹居倶楽部 代表理事）

竹中工務店で様々な建築に関わる中、1995年1月17日の阪神淡路大震災を経験し、転機となった。

「建築って社会とつながって、拓（ひら）かなければならない。」との思いに至る。そして、建築を美術館で展示する取組みを始める。阪神大震災で、建築家・武田五一の芝川邸が被災し、明治村に移築する際、実測をして、1996年にその資料や凶面の展覧会を三重県立美術館で行った。展覧会の際、『聴竹居』の持ち主である藤井厚二の次女と繋がる事ができ、

『聴竹居』が2001年に借家になり、その際、実測。この住宅は、藤井厚二が40才の時、1928年に建てた5番目の自邸である。現在、“聴竹居倶楽部”が、企画運営している。

藤井は、村野藤吾と同世代（年齢は村野が三つ下）で、日本の気候風土に適合した日本の住宅を実現しようとした、日本で最初の人。理論としての日本の住宅を実践した。和風と洋風、それぞれの技術やデザインを統合し、その長所に拠った様式を追求している。そのため、いつの時代にも魅力的で愛着が保たれる「タイムレスデザイン」を実現している。

温熱環境については欧米諸国と日本の気候とを比較し、快適の明確化を図る、「日本の住宅」を出版。1919年に欧米を視察して、日本の住宅がいかに貧しいかを実感し「其の国を代表するものは住宅建築である」と言った。そこから実験住宅をつくり続けた。

藤井は、関東大震災の3日後には、現地を見ている。その上で、日本の住宅は欧米のものをそのまま持ってきてはいけない、ということを反映している。

3.11の東日本大震災後、建築家がこぞって現地に行ったが、地域と繋がっていないので、何もできずに帰っていったことをもっと教訓にしなければならない。災害が起こる前に、災害から学ぶしておく。普段の付き合いができていくか否かこれが、ライフラインに繋がると思う。

II部「住宅遺産トラスト&住宅設計作法」

講師：野沢正光氏（建築家・東京）

【住宅遺産トラスト】：ちょっと前の住宅を何とか残したい。そして残ると楽しい！我々が住宅を考える時にも、前のが無いと困るから。2008年、吉村順三設計の園田高弘邸について、持ち主から、NPOに相談があり、2012年に展覧会を開催したところ、日経新聞に掲載され、大阪の方（熱狂的な吉村ファン）が購入する事になった。他の建築もいろいろな相談を受けて、2013年4月に「一般社団法人 住宅遺産トラスト」を設立した。継承したが、解体されてしまったケースもある。建築サイドが残したいという思いだけではうまくいかない。不動産や税金関連、相続の問題に対応できる人材が大事。また、法や制度も重要で、行政への働きかけや、条例の研究、展開も行っている。

【私の設計作法】「住宅の架構をさかのぼる。支え構造と分離ユニット、サポートとインフィルを分けて使う」という考え方。コルビュジェの“ユニテダビタシオン”は、コンクリート架構+プレハブ化。太高正人の“人工土地”、清家清の“私の家”など。建築が趣味っぽいとこがなく、すべて、スケルトン。中にはいつかいるものが循環する。サポートを趣味っぽくつくと長続きしない。シェルターとしての性能をしっかりと確保する。架構で大工が喜ぶものをやりたい。これは日本だからできる“木造ドミノ住宅”。徹底したスケルトンインフィルで、裸の家に戻る事ができる。

今、住宅地がどんどんつまらなくなっている。「ソーラータウン府中」では、住宅をつくるのではなく、住宅地をつくる。土のままの街路はアスファルトの住宅地と温度が違う。そんな住宅地を増やしてゆくべき。

宮脇壇が24年前やった『青葉台ボンエルフ』は住宅をやらずに、町並みをやる。隙間に緑を植える。建築というのは、どうなっていたら一番楽しくて、クライアントにとって豊かなのか、ちゃんと冷静に、考えつくる。そして、考えていることを誠実に、社会の中で話してゆく、それが建築を「拓く」という事である。